

幼稚園

平成 7 年 度

教育研究員研究報告書

幼稚園

東京都教育委員会

平成7年度

教育研究員名簿

主題	分科会主題	地区名	幼稚園名	氏名
幼児が充実した生活をしていくための指導の在り方	第1分科会 一人一人を大切にすゝ指導の在り方 —— “いじめの芽” を探る ——	中央 新宿 新宿 文京 台東 江東 品川 世田谷	月島第一 落合第三 天神津 根石浜 さくら かえで 塚戸	岩城隆子 葛西彰子 ◎櫻田百合子 中野圭子 榎本夕希子 古川寿子 △風間美絵子 天野由利子
	第2分科会 様々な感情を味わいながら、自分や友達の 思いに気付く幼児を育てるための援助の 在り方	港 江東 大田 渋谷 中野 北 練馬 江戸川 清瀬	南 香取 羽田 鳩森 やよい じゅうじょう なかはら 光が丘わかば 篠崎 けやき	山 取田 森 い 高木 森 鈴木 金

◎世話人 □副世話人 △記録

担当 教育庁指導部初等教育指導課指導主事 井上 千枝美
教育庁指導部初等教育指導課指導主事 岡上 直子

目 次

研究に当たって	2
<第1分科会>	
一人一人を大切にする指導の在り方 — “いじめの芽”を探る —	
I 主題設定の理由	3
II 研究方法	3
III 研究内容	
1 “いじめの芽”とは	4
2 一人一人を大切にするととは	4
3 気になる幼児の姿とその背景	5
(1) 気になる幼児の姿	5
(2) 気になる幼児の姿の背景	6
4 幼児期に育てたいこと	7
5 教師の指導のおさえ	8
6 実践事例	
(1) 気になる幼児の事例	9
① 「友達との会話が成り立たないY児」	9
② 「困っている友達の姿を面白がるD児とA児」	9
③ 「家庭との連携により、変容の姿が見られたA児」	10
(2) 葛藤を乗り越えながら遊ぶ幼児の事例	12
IV まとめと今後の課題	13
<第2分科会>	
様々な感情を味わいながら、自分や友達の思いに気付く幼児を育てるための援助の在り方	
I 主題設定の理由	14
II 研究方法	14
III 研究内容	
1 主題のとらえ方	15
2 自分や友達の思いに気付くきっかけと過程	16
(1) 自分や友達の思いに気付く過程の例	16
(2) 自分や友達の思いに気付くきっかけと気付きの例	17
3 実践事例	
(1) 友達と同じ動きをするうちに自分の思いに気付いていったA児の事例	18
(2) 友達の動きや物がきっかけになって自分の思いが はっきりしていったD児の事例	20
(3) 友達と目的を実現するために、遊び方について共通理解を必要 とする場面に出合い、相手の思いに気付いていったH児の事例	22
IV まとめと今後の課題	24

研究に当たって

共通研究主題

「幼児が充実した生活をしていくための指導の在り方」

幼児期は、人間形成の基礎となる豊かな心情や物事に自分からかかわろうとする意欲、健全な生活を営むために必要な態度等が培われる大切な時期である。この時期に、幼児は主体的に環境にかかわり、豊かな体験を積み重ねることで、活動に対する意欲をもつ。また、共感や葛藤などの多様な感情体験の中で、自他の存在を認識し、自己を確立していくことや、人への信頼感と愛情をもち、人と一緒に生活することの楽しさを味わうようになる。このような体験を積み重ねていくことが、幼児の生活を充実させていくことにつながるものと考えられる。

以上のことを踏まえ、一人一人の幼児が友達や教師とのかかわりの中で、自分の思いを実現し、相手のことも尊重できる充実した園生活を送るためには、よじきに何を育てておかなければならないのか、また、教師の援助はどうあるべきかを考えていくことが重要なことである。

そこで、今年度は、共通研究主題を「幼児が充実した生活をしていくための指導の在り方」として、研究を進めることにした。研究に当たっては、2分科会を構成し、各分科会における研究主題及び、研究内容は次のようにおさえた。

第1分科会

「一人一人を大切に作る指導の在り方 —— “いじめの芽”を探る ——」

幼児が充実した生活を送るためには、一人一人が安定し、その子らしさが発揮でき、それを認め合える仲間がいることである。しかし、最近の幼児の姿からは、不安定感や人間関係の希薄等、気になる姿が見えてくる。そして、そのような中に、幼児期の『いじめの芽』があるのではないかととらえた。そこで、その背景や原因を探り、『いじめの芽』を生じさせないために幼児期に育てておくべきこと、さらに、教師の指導の在り方について探っていくことにした。

第2分科会

「様々な感情を味わいながら、自分や友達の思いに気付く幼児を育てるための援助の在り方」

幼児が心情豊かで充実した生活をしていくためには、自分や友達の思いを感じ取り、その思いを実現しながら、自分自身の大切さに気付いたり、友達とかかわる心地よさや友達の大切さを知ったりすることが大事なのではないかと考えた。そこで、幼児が遊びの中で様々な感情を味わう経験を通して、どのように自分や友達の思いに気付いていくのかを明らかにし、自分や友達の思いに気付く幼児を育てるための援助の在り方を探ることにした。

一人一人を大切にしている指導の在り方

—— “いじめの芽”を探る ——

I 主題設定の理由

今日の、いじめ問題は、社会で緊急かつ重要な課題となっている。わたしたちは、「幼児期においてもいじめはあるのだろうか」という疑問をもつところからこの研究を始めた。

最近の幼児の姿を見ると、落ち込むと立ち直るのに時間がかかる、楽しいことをしていてもしらけている、自分の気持ちを思うように相手に伝えられない等の気になる姿が見られる。また、保護者は、核家族化、少子化により地域社会の中で、子育てに関する相談相手が身近にいないことや、情報化により価値観が多様化して子育てへの不安をもっている。

このような現状から幼児期にも“いじめの芽”があると考え、その背景を具体的な場面を通してとらえ、真に一人一人を大切にしている指導について考えていきたい。

II 研究方法

【研究の構想図】

共通研究主題

幼児が充実した生活をしていくための指導の在り方



研究主題

一人一人を大切にしている指導の在り方
—— “いじめの芽”を探る ——



研究のねらい

幼児期の“いじめの芽”をとらえ、それが生じた背景から幼児の内面を理解し、指導の在り方を探る。



研究内容

- ・ 幼児期の“いじめの芽”とは何かを明らかにする。
- ・ “いじめの芽”を生じさせないために、幼児期に何を育てなければならないかを探る。
- ・ 幼児一人一人を大切にしているための教師の指導の在り方を探る。



研究方法

(基礎研究)

- 文献、事例から「いじめ」について明らかにする。
- ・ 「いじめ」についての共通理解をする。
- ・ 「いじめ」が生じる背景を探る。

(事例研究)

研究保育

- ・ 気になる場面を行動描写法で記録する。
(会話、言葉、動き、表現、状況)

《分析・考察の観点》

- ・ 幼児の内面・友達関係・表現の仕方・教師の援助

事例研究

- ・ 保育の中で気になる場面の記録を分析する。
- ・ 最近の保護者の価値観をとらえる。

Ⅲ 研究内容

1 “いじめの芽”とは

「いじめ」の定義は、自分より弱いものに対して一方的に、身体的・心理的な攻撃を継続的に加え、相手が深刻な痛みを感じるものであると、言われている。

幼児期は、自己中心的な時期であり、探究心や自発性が出てきて「自分で、自分で」などと言って自分から行動をおこしていることを自覚する自我が芽生える時期でもある。

したがって、友達とかかわりたいために、その表現力が未熟なことから、友達をぶってしまったり、友達の靴を隠して関心を求めたりする姿が見られる。これらの姿は、相手にとっては苦痛・不快なことではあるが、本人は、いじわるをしよう意識した行為ではないことが多く、その子供の発達上の行為である。

しかし、最近の幼児の姿を見ると、今までの幼児には見られなかった「気になる姿」が見られてきている。例えば、「自己主張はするが、相手の話を受け入れられない」「トラブルを避けて主張しない」「不満や不安定感のはけ口を、弱いとみなしている者につける」「落ち込むと立ち直るのに時間がかかる」「楽しいことをしていても無感動である」等の姿がみられる。これらが一過性のものでなく、同じ幼児にいつも見られる姿であった場合は「いじめ」につながるであろうと考えた。そこで、気になる姿を「いじめの芽」ととらえ、放置せず、指導をすることが必要であると考え、指導の在り方を探った。

2 一人一人を大切にすることは

幼児がその子らしさを十分発揮するには「自分が大切にされていると感じる」ことが大切である。これは、愛情と信頼関係が基盤となる。この具体的な姿として、幼稚園では、

- ・いつでも温かく、肯定的に自分を見てくれている教師や友達がいる
- ・嬉しいときに共感したり、悲しいとき、困っているときに受け止めたり、励ましたりしてくれる教師や友達がいる
- ・自分をありのまま受け止めてくれる教師や友達がいる
- ・自分のよさを認めてくれる教師や友達がいる
- ・自分で考えたことの価値を認めてくれる教師や友達がいる等である。

これらを基盤として、幼児が「自分が大切にされていると感じる」大切な要素は、次の点であると考えられる。

- 存在感……一人一人が学級の中で存在感がある。
- 主体性……自分が活動や遊びをしてもよいということが保障される。
- 相互性……自分のやったことに共感し、認めてくれる人間関係がある。
- 自我の確立……ありのままの自分でよいことが保障される。

3 気になる幼児の姿とその背景

(1) 気になる幼児の姿

「気になる幼児の姿」を出し合ったところ、次の5つの側面がとらえられたが、幼児の姿は5つの側面と相互に関連し合っている。

側面	気になる幼児の姿	気になる幼児の姿の具体例
① 生活体験	<ul style="list-style-type: none"> ・体験不足である ・生活習慣が身に付いていない 	<ul style="list-style-type: none"> ・生き物を物のように扱ったり、粘土や砂遊びを汚がったり、歌を煩さがる。 ・新しい活動には不安で遊び方を確認してから始める。 ・面倒がって遊び場作りや片付けをしない。 ・排泄の習慣が身に付いていない。極度の偏食がある。等
② 自我の確立	<ul style="list-style-type: none"> ・固執性がある ・自己調整ができない 	<ul style="list-style-type: none"> ・遊具、自分のイメージなどに固執する傾向がある。 ・衝動的にぶつ、物を投げる等の行動で感情を表し、気持ちのコントロールができない。 ・一番でないと気が済まなかったり、自分の思い通りにならないとイライラしたりあきらめたりし、人の話を聞き入れない。等
③ 表現力	<ul style="list-style-type: none"> ・表現方法が未熟である ・相手を傷付ける表現をする 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の思いを十分伝えられなかったり、言葉遣いや表現方法がわからないとあきらめ伝えようとしなかったりする。 ・告げ口、からかい、遊びの邪魔、相手を傷付ける言葉遣い等をする。等
④ 人間関係	<ul style="list-style-type: none"> ・人の気持ちに気付かない ・依存的である ・トラブルを避ける ・弱者に強い態度をとる ・結果で判断する 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の思いは主張するが相手の考えは受け入れられない。 ・友達が困っていても無関心、無視するなどの姿がみられる。 ・大人の顔色を伺い指示を待つ。 ・友達に嫌な事を言われたり遊びの参加を断られたりすると、すぐにあきらめ自分の気持ちを押しえてトラブルを避ける。 ・言い訳をしたり人のせいにしたり、また、相手により自分の出し方を変える。 ・できる、できないで相手を評価する。等
⑤ 心情面	<ul style="list-style-type: none"> ・すぐ落ち込む ・無気力である ・無感動である 	<ul style="list-style-type: none"> ・一度つまずくと傷付き落ち込みやすい。 ・知識を自慢するが運動をして遊ぶことが少なく、すぐ「疲れた」と言う。 ・不安でおどおどしていて躍動感や生命感に乏しい。 ・「そんなの知っている」と無感動でしらせ、また、無気力で表情に乏しく、相手の気持ちや愛情を感じ取れない。等

(2) 気になる幼児の姿の背景

「気になる幼児の姿」の背景を、下記のようにとらえた。

(現状欄の番号は気になる幼児の姿の側面番号である)

背景	背景から見られる現状	背景の具体例
個人的・家庭的な背景	<ul style="list-style-type: none"> ・子育ての相談相手がいない(④) ・子育てへの意識が多様化している(①②③④⑤) ・大人中心の生活である。(①③④⑤) ・簡便な生活を求める(①④⑤) 	<ul style="list-style-type: none"> ・子育てを教育産業に依存する傾向がある。 ・親自身が不安定な気持ちで子供に愛情が注げなかったり、愛情はあるが表現方法が未熟であったりする。 ・親の意識や大人の価値観が幼児にも影響している。 ・価値観が特異である。 ・しつけは家庭ではせず他者に任せようとする傾向がある。 ・喧嘩を避けたがる。 ・人との比較をするなどの傾向がある。 ・結果を重視した子育ての傾向がある。 ・知識や目に見えることを重視する傾向がある。 ・育児書による子育ての傾向がみられる。 ・自分の考えを子供に押しつける傾向がある。 ・各場において判断基準が違い、子育てに一貫性がない。 ・過干渉であるにもかかわらず、体調や生活習慣、周囲への気遣いに無関心さが見られる。 ・子育てについて他人から干渉されるのを避ける傾向がある。 ・親の生活リズムを優先する傾向がある。 ・手間をかけたりすることを嫌う傾向がある。 ・汚いことやその始末を嫌う傾向がある。
社会的な背景	<ul style="list-style-type: none"> ・人間関係が希薄である(①②③④) ・テレビの影響が大きい(①③④) ・遊び場が減少している(①②③④⑤) 	<ul style="list-style-type: none"> ・少子化傾向である。 ・幼稚園が少人数化している。 ・地域社会の人々との心のつながりが無い。 ・人の嫌がることや失敗を取りあげて嘲笑うマスコミの影響が強い。 ・身体を思いきり動かす環境が少ない。 ・テレビゲームやテレビ視聴など間接的なかわりが多く直接的な体験が少ない。

気になる幼児の姿は、これらの背景が相互に関連し合う中で見られるものであると考える。

4 “いじめの芽”を生じさせないための幼児期に育てたいこと

幼児に見られる気になる姿や背景から幼児期に育てたい内容（○印）を5つの側面からとらえた。これらの内容は5つの側面と複雑に関連している。

《生活体験》	○豊かな具体的・直接的体験	○基本的な生活習慣
《自我の確立》	○良いこと悪いことの判断	○主体性 ○自己肯定感
《表現力》	○相手に分かる素直な表現	
《人間関係》	○人に対する信頼感	○他者認知
《心情面》	○豊かな感情体験	○柔軟性 ○耐性

《“いじめの芽”を生じさせないための各年齢における具体的な指導の重点》

	3歳児	4歳児	5歳児
生活体験	<ul style="list-style-type: none"> ・やりたい遊びを十分する ・体を動かす心地よさを味わう ・生活のリズムを整える ・園生活に慣れる 	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろなことに興味関心をもってやろうとする ・基本的な生活習慣を身に付け、自分のことは自分です 	<ul style="list-style-type: none"> ・「何だろう」「どうしてかな」という好奇心や関心をもち、考えたり試したりする。
自我の確立	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の物と人の物との区別が分かる ・気持ちの立て直しができる ・自分でできたことを喜ぶ 	<ul style="list-style-type: none"> ・していいこと、いけないことが分かる ・些細なことにめげない ・自分はできるという自身をもつ 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分で考えて行動する ・自分のよさが分かり、自信をもつ ・学級の中で存在感をもつ
表現力	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の気持ちや欲求を表出する ・嫌なことは嫌と言える 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分を十分発揮する心地よさを味わう ・自分の思いや欲求を言葉でも友達に伝える 	<ul style="list-style-type: none"> ・相手に分かってもらえる表現の仕方をする ・相手を傷つける言葉や言い方に気付く
人間関係	<ul style="list-style-type: none"> ・大人に対する安心感をもつ ・大人の言葉を聞くことができる ・自分以外の友達の存在に気付き、友達と一緒にいる心地よさを感じる 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わう ・友達の話を聞いて、気持ちを知ったり受け止めたりする ・友達に対して優しい気持ちをもつ 	<ul style="list-style-type: none"> ・仲間意識をもつ ・友達を受け入れる態度や思いやりの気持ちをもつ ・一人一人のよさや違いを認め合う ・友達の頑張りを認め励ます
心情面	<ul style="list-style-type: none"> ・多様な感情体験を味わう ・思い通りにならないことが分かり、大人に支えられながら耐える 	<ul style="list-style-type: none"> ・思い通りにならない体験を通して様々な葛藤を味わう ・自分の気持ちを調整する ・友達との気持ちの通い合いを嬉しく思う 	<ul style="list-style-type: none"> ・やり遂げた満足感やできた時の成功感を味わう ・少し難しそうに思うことにも挑戦し、乗り越える気持ちをもつ

5 教師の指導のおさえ

幼児期に育てたいことや気になる幼児の姿の背景を踏まえ、次の3つの面から指導のおさえを検討した。

<温かい学級の雰囲気作り>

- ・学級の一人一人「皆が大事な人」であることを知らせる。
- ・一人一人のその子らしさ、よさを見付け、自信をもって生活できるような雰囲気を作る。
- ・一人一人の持ち味を生かした指導をする。
- ・感じたこと、思ったことを表現した時に受け止め安心感を味わわせ、自由に話せるような雰囲気を作る。
- ・幼児が自分からかわり、自己を十分に発揮して遊べるような環境の工夫をする。

<一人一人への深い幼児理解>

- ・愛されている満足感、安心感を味わえるようにする。
- ・ありのままの姿を認め、受け入れる。
- ・「つまらない、悲しい、悔しい、楽しい」などの様々な感情体験の場を大切にする。
- ・幼児の気持ちの橋渡しをし、認め合い受け入れ合える姿を育てていく。
- ・我慢、つまずきなどの葛藤体験を乗り越えていく姿を温かく見守ったり支えたりする。
- ・不安感、いらいらなど原因も含めて受け止め、心の安定を図れるようにする。
- ・自分の思いを態度や言葉で表現し、相手に伝える大切さに気付かせる。
- ・相手の気持ちを傷付けたり、心の痛みが分からなかったりする時は気付かせる。
- ・周りには、いろいろな思いをもった人がいることを知らせ、受け入れ合えるようにする。
- ・友達と共に遊びや生活をしていく喜び、満足感を味わえるようにする。

<心の通い合う家庭とのつながり>

- ・一人一人の「その子のよさ、成長の姿」やその日あったことなどを具体的に伝えていく。
- ・保護者の思いや子育ての悩み、さらには家庭内の問題等、保護者の訴えを十分に聞いて受け止めたり、実際の場面を通して、共に具体策を考えたりする姿勢をもつ。
- ・幼児期の発達筋道をいろいろな機会を通して具体的に伝えていく。
- ・保護者が気軽に相談ができるようにするとともに、相談の窓口は担任教師だけでなく、園全体で、いつでも応じていく姿勢をもつ。
- ・保護者同士の豊かな人間関係が作れるように、地域の人との心のつながりをもつなど開かれた幼稚園づくりを目指す。
- ・家庭との連続性を踏まえて、幼児が豊かな経験をしていけるように、保護者と共に考え工夫していくようにする。

6 実践事例

(1) 気になる幼児の事例

① 「友達との会話が成り立たないY児」 2年保育5歳児 6月

Y児は、マットの周囲に2段重ねで大型ブロック（以下KB）を組み立てながら「お前たち、2個、4個（2連KB、4連KBの意味）！」とS児T児M児O児に向かって大きな声で言う。4人は走って、Y児に言われたKBを運ぶ。Y児はKBを受け取りながら、自分で要求した大きさにないと「4じゃない、2、2！これはしまってるっしょい。」と言って返す。4人は何も言わずY児に従う。このような動きを繰り返す、囲みを作る。

途中で何も言わずに抜けたT児が戻り、Y児に長縄を渡し「縄、持ってて。」と2度言うがY児は無言で無表情。T児は縄を投げ捨てて去り、それをY児が目で追う。

《考察》

○ “いじめの芽”と思われる気になる幼児の姿

- ・ Y児は、相手に思い通りに作りたい気持ちを言葉や動きに出して伝えたいが、思い通りにいかなかと、いらいらした気分になる。
- ・ Y児が自分の思いを伝えようとしている時には、言葉のきつさや行動の強さがみられる。表現方法の未熟さ・友達の気持ちに気付かない・気持ちのコントロールができないなどの自己中心性が見られる。

○ 教師の援助

- ・ 自己中心性が強く、言葉での表現が苦手な幼児には、その思いの橋渡しをしながら友達の言動や気持ちに気付かせ、互いの気持ちが通じ合う心地よさを味わえるようにする。

② 「困っている友達の姿を面白がるD児とA児」 2年保育5歳児 6月

円陣になり座って集合している。H児が座る場所を探しながら円陣の外側を歩き、友達のD児を見つけて、隣に入ろうとする。D児は隣の幼児に体を付けるようにしてH児を入れない。H児が反対側のD児とA児の間に行くと、A児は体をD児の方に寄せて入れない。H児は再び、他の場所に入れるか見ている。S児はその様子を見て「もっと広がろうと。」とつぶやき少し後ろに下がる。T児が「大きくなあれ、大きくなあれ。」と歌うように言い、少し後ろに下がる。担任教師が保育室に入ってきて「もう少し大きな丸になろう。」と声をかけると、D児は後ろに下がる。H児はD児の隣に座る。

《考察》

○ “いじめの芽”と思われる気になる幼児の姿

- ・ D児とA児は既に座っているので安心感と優越感がある。H児が隣に座りたい気持ちで来たことに気付いているが、ちょっと反応がみたいと思っている。
- ・ D児やA児が力関係や、相手の反応を見ながら行動をとっていることは、困らせている友達に対しての接し方や表現方法に未熟さがあるからと考えられる。

○ 教師の援助

- ・ 淋しい思いをしている幼児の心の痛みが分からないときは、その幼児の気持ちを代弁して相手の気持ちが分かるようにする。

③ 「家庭との連携により、変容の姿が見られたA児」 2年保育5歳児

A児は自己主張が強く、園生活の中で、相手の気持ちを受け入れられない、自分の思うようにいかないと言ったりと友達の悪口を言ったり、遊びをやめてしまったりするなどいじめの芽につながると思われる言動が目立った。教師は家庭との連携を図りながら、A児への適切な援助を探った。

A児の気になる姿（5歳児4月）	家庭的背景
<ul style="list-style-type: none"> ○A児は自己主張が強く、友達に対して、命令的な言い方や口調がきつくなることがある。 ○笑顔が少なく、教師の言動を意識し、注目している。神経質な面があり、生活習慣は身に付いているが、細かいことを気にする。 ○A児は毎日のようにB児・C児と遊ぶが、互いに自己主張し合っている。特にB児とのぶつかり合いが多く口げんかを繰り返している。 ○A児は自分の思いが通らなないと、何回も不平や不満を言い、時には自分の言動を正当化して教師に援助を求めてくることもある。 ○A児は自分にかかわりのない友達の言動には、あまり関心を示さず、自分の思いのままに動いている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○A児の保護者は子育てや家庭内のしつけには熱心である。神経質な面もあり、細かいことにも厳しいようである。 ○保護者はA児を理解しようとする気持ちが強い。園生活の様子をA児から聞き、全面的にA児を受け止めている。 ○A児の友達関係にも神経質になっておりA児とB児のけんかの原因やA児とB児C児3人のかかわり方を気にしている様子が見られる。教師に園生活の様子を聞きにくることもある。 ○保護者自身が情緒不安定になりがちで気持ちの変化が表情に表れやすい。

教師の対応

<ul style="list-style-type: none"> ○A児たち3人の遊びを見守りながら、個々が自分のやりたいことを言葉で伝えることに気付かせる。場面に応じて、教師が個々の考えを伝えていく役割を果たしていくようにした。 ○遊具や用具など友達と共有し合う姿を認め、その姿勢を身に付けられるようにした。 ○A児・B児・C児の思いを十分聞いたり、受け止めたりしながら教師との信頼関係の中で3人の思いを調整した。 ○A児にはB児やC児の考えに気付かせ、友達と遊ぶ楽しさを感じとらせるようにした。 ○口調がきつくなりがちな3人に対して、相手の思いに気付かせていった。 	<ul style="list-style-type: none"> ○保護者が訴えてくる悩みや不安を十分聞きとる機会や時間を確保し、保護者と教師の信頼関係を保てるよう配慮した。 ○A児の園での具体的な姿を伝えるようにし、同時に、A児だけでなく他の幼児の姿も知らせ、幅広い視野でA児を見ていけるように助言した。 ○A児が、B児・C児との友達関係の中で自己主張し、時には自分の思いが通らないことを経験していくことの大切さを知らせることで、理解を得られるようにした。
---	--

A児の変容の過程（5歳児2学期）

- A児、B児、C児は自己主張し合いながらも毎日3人で遊ぶことが多かった。A児とB児は遊具を取り合ったり、自分の欲求を言い合ったりすることもあり、互いに譲ることができず、教師が調整するようにした。C児が加わり3人で解決していくこともあった。
- この時期、A児たち3人の遊びにE児が加わることもあったが、A児はE児に対して自分の考えを命令的な口調で伝えている場面が目立った。教師がそのことに気付かせると、納得した表情や態度を見せるようになった。
- A児は、B児、C児とのグループ活動の中で、友達と考えがくい違って自分の思うようにいかない場面もあったようだが、少しずつ自分を抑え、友達の考えを受け入れていくようになった。
- この頃、保護者はA児が友達に降園後の約束を断られたことに本人以上にショックを受けた。A児がかawaiiそうという思いが強く、以後しばらくの間降園後の付き合いに参加せず、表情も暗かった。教師はこの状況を把握し、保護者自身がA児の気持ちを受け止め、励まし元気付ける立場となるよう助言した。これ以後、毎日必ずA児と保護者両者に声をかけるよう心がけ、気持ちをほぐすようにした。



A児と保護者の変容（5歳児3学期）

- 3学期になり、A児たちは一方的に自分の思いを主張するだけでなく、相手の反応を確かめたり、また相手の言動を受け入れたりと遊ぶようになった。3人でトラブルを解決し遊びを楽しむ様子が見られた。以前に比べA児の不平不満は少なくなったが、教師に訴えることで気持ちをコントロールしている様子が見られた。
- 教師とA児の会話の中で、A児はB児を大好きな友達として思っていることが分かった。B児とのトラブルの中で相手のよさに気付き、より深くつながりを感じとったようである。このことをA児の保護者に伝えたところ、A児の気持ちを十分理解していなかったことを強く感じたようであった。
- A児・保護者共に表情が和らぎ精神的に安定した様子が見られ、降園後の付き合いも円滑になった。保護者からは、家庭で小言が多かったこと、A児をほめてあげることが少なかったことを反省していると教師に話しかけてくるようになった。

<全体考察>

- A児は、友達と自己主張し合う中で幾度となく葛藤体験をし、自分なりに気持ちをコントロールし、調整することができるようになったと考えられる。
- A児の成長や変化については、日々保護者に具体的に伝えるよう配慮したことで、保護者が安心感をもつことができ、A児のよさやありのままの姿を認められるようになった。
さらに、A児のたくましきを感じとり、自分自身への励みとして受け止めたようだった。これらのことが、A児への接し方に変化を与え、A児は情緒も安定し友達との遊び方、自己表現の仕方など気になる姿に変容が見られた。

(2) 葛藤を乗り越えながら遊ぶ幼児の事例

2年保育5歳児 10月

幼児たちがみこしをかついで遊んでいる時、S児は拍子木、K児は牛乳パックを打ちながら、みこしの先導の役で参加する。その時S児が拍子木を落とし、K児がそれを拾う。

幼児と教師の言動	教師や幼児の思い
<p>① S児「(K児が)とった。」と涙ぐみ下を向いている。</p> <p>② K児はS児に拍子木を渡しながら「ちがう。」</p> <p>③ 二人はしばらくそのまま動かない。</p> <p>④ 二人の様子を見ていた教師が、「どうしたの?先生知らないから教えてくれる?」と話しかけ、二人の間にしゃがむ。</p> <p>⑤ K児「ぼくが拾ったの。」</p> <p>⑥ S児「Kちゃんがとろうとした。」と、小さな声で教師に話す。</p> <p>⑦ 教師「SちゃんはKちゃんにとられると思ったんだ。Kちゃんは拾ってあげようとしたんだね。」</p> <p>⑧ 教師「本当にとろうとしないよね。」と念を押す。「Kちゃんもこういうの欲しいの?」</p> <p>⑨ K児は、うなづく。</p> <p>⑩ 教師は廊下を歩く。S児はK児の後方から教師を見ている。</p> <p>⑪ 教師が楽器棚の前で止まったのを見て、二人ともどちらからとなく走りだし、教師の所へ行く。</p> <p>⑫ 教師「どっちがいい?」と何組かの拍子木を打ち、K児に選択させる。</p> <p>⑬ K児は気に入ったのをとり、S児にみせる。</p> <p>⑭ S児は笑いながらうなづく。</p> <p>⑮ 教師「これみたいにしたら。」とひもでつながっている拍子木をみせる。</p> <p>⑯ 二人は「やってみる!」と保育室に走る。</p>	<p>①② S児はK児にいじわるをされたと思い、K児はS児に思いが伝わらず、二人共嫌な気持ちでいるが自分たちで解決方法が見付からない。</p> <p>⑤⑥ 自分の思いだけを主張している。</p> <p>⑦⑧ S児の思ったことをK児に伝え、K児に念を押す。K児も使いたい気持ちがあると感じ、聞いてみる。</p> <p>⑩ 教師の意図が分からずS児は不安を感じる。</p> <p>⑪ 二人とも同じように教師の意図が分かり、嬉しくなって走る。</p> <p>⑬⑭ K児は嬉しい気持ちを素直に表し、S児に見せ共感する。</p> <p>⑯ 教師の提案に興味をもち、一緒にやろうとする</p>

《考察》

- 二人は普段からよく遊んでいるが、困ったことがあると、思いを相手に伝えられず自分のことを主張するだけで、まだ自分たちでは解決できない。
- 教師が事前から二人の様子を見守り、解決できるように互いの気持ちを伝える役目をしたり追い込まれていたK児の思いをかなえたりしたことで気分転換が図れ、次の遊びにつながった。
- K児、S児のような幼児には、葛藤体験の場面で、自分たちで問題を解決していけるように見守ったりコミュニケーションのとり方を知らせていくことが大切である。

IV まとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

① 幼児期の「いじめの芽」とは

わたしたちは、幼児期に「いじめ」はあるのだろうか、という疑問を抱きながら研究を始めた。始めに、いろいろな文献や資料を調べていくうちに、幼児期にも「いじめの芽」はあるのではないかとということが分かった。そこで、最近の幼児の気になる姿を見つめてみると、幼児にも、様々な社会的背景を受けて必死で生きていかなければならない厳しい現実がある事が見えてきた。そこに見られる、無気力、無感動、しらける、おちこみやすい等の気になる姿は、幼児の精神的不安定感から発するSOSのサインと私達は捉えた。こうしたサインを見逃してしまうと、いじめたりいじめられたり、というような行動を起こし、「いじめの芽」につながるのではないかと考えた。

また、幼児期の「いじめの芽」は、児童期以降の「いじめ」と異なり、本人がいじめようと意識していないことである。これは、幼児期は、自己中心的で社会性の未発達な段階にあり、自分以外の人の存在を認めつつも、自分とのかかわりの度合いで行動をとる傾向があるためと思われる。

② 幼児期に育てたいこと

○「いじめの芽」を生じさせないためには、一人一人が安定し、その子らしさが発揮でき、それを認め合える人間関係を育てることである。そのためには、自分のよさや友達のよさに気付き、自信や存在感をもつと共に相手を尊重する気持ちをもてるようにすることである。

○日常の生活の中で、豊かな具体的、直接的な体験をしていく事が大切である。その中で「いじめの芽」につながると思われる言動は、即、指導を必要とするが、そうではなく、発達に必要と思われる行動は見守り、体験させることが、より豊かな人間関係を育てていくものとする。教師は、「いじめの芽」につながる行動と発達に必要な体験とを見極める目をもつことが大切である

③ 教師の援助

○幼児が自分らしさを発揮し、互いに認め合える、温かい学級作りを目指すためには、幼児一人一人を深く理解することが基盤である。

○幼児と共に生活するという気持ちを忘れず、教師自身が資質の向上に努め、人間性を磨き、さらに幼児の心を育てることを意識していく事が大切である。

○教師の言動が、無意識のうちに、「いじめの種」を蒔いていないかという反省のもと、教師自身の言動を見直すことが必要である。

○家庭やその背景を理解し、保護者の気持ちや生活している状況をまず受け止め、教師間で教育観の共通化を図り、園全体での協力体制を工夫する。

(2) 今後の課題

今後は、「いじめの芽」を生じさせないように、さらに実践を深め「一人一人を大切にする指導の在り方」を探る。

幼児が充実した生活をしていくための指導の在り方

—— 様々な感情を味わいながら、
自分や友達の思いに気付く幼児を育てるための援助の在り方 ——

I 主題設定の理由

幼児は心身の著しい発達に伴い、環境に対して積極的に働きかけをするようになる。そして、人や物などの周囲の環境に対しての興味・関心が高まると、自ら様々なかかわりを持ちながら、嬉しさ・楽しさ・怒りなどの様々な感情を味わう。そのような経験を通して、自分自身の思いに気付いたり、友達とかかわる心地よさを感じながら友達の思いに気付いたりしていくものと考ええる。

しかし、日々の保育の中で幼児の姿を見てみると、自分の欲求が出せなかったり、どうしたらよいか分からずにただ友達について行動したり、友達の思いを気に止めずに行動したりする姿が目立ち、自分の思いを実現しようとする力が希薄になっているように思われる。こうした幼児の姿から、幼児が自分自身や友達の思いに気付いていないのではないか、自分の思いやイメージがもてずに遊びに満足していないのではないか、友達と互いの思いを出し合いながら遊びを進める時のかかわり方を知らないのではないかと考える。この時期、幼児が将来にわたって人格形成していく上でも、“自分の思いに気付く”つまり、自分がどうしたいのかを経験を通して気づき、自分の思いを実現することは大切であると考ええる。

そこで、私たちは、幼児が遊んでいる時の欲求や心情を読み取り、遊びの中で様々な感情を味わう経験を通して、どのように自分や友達の思いに気付いていくのかを明かにしていくことで、自分や友達の思いに気付く幼児を育てるための援助の在り方を探りたいと考えた。そして、このような内面に即した援助を工夫していくことが、幼児が心豊かで充実した生活をしていくことにつながると考え本主題を設定した。

II 研究方法

- 1 幼児が好きな遊びの中で、自分を出しながら遊んでいると思われる場面や、友達とかかわって遊んでいる場面を観察し、自分や友達の思いへの気づきについて事例研究を進める。
- 2 観察記録の分析と考察を以下の視点で行う。

分析の視点	┌	・どのような興味や欲求をもっているか。
		・どのようなことを感じているか。
		・自分の思いを、どのような動きや言葉で相手に表現しているか。
		・相手の言葉や動きに、どのように反応しているか。
考察の視点	┌	・どのような感情を味わっていたか。
		・自分や友達の思いに、どのように気付いていったか。
		・自分や友達の思いに気付くためには、どのような教師の援助が必要か。
- 3 遊びの中で様々な感情を味わうことを通して、幼児がどのように自分や友達の思いに気付いていくのかを明らかにし、教師の援助の在り方を探る。

Ⅲ 研究内容

1 主題のとらえ方

【様々な感情を味わいながらとは】

幼児は友達とかかわることで、相手に自分の思いが受け入れられて喜んだり、逆に相手に伝わらないことや拒否されることで寂しかったり悲しかったりする感情を味わう。このように様々な感情を味わう中で、自分の思いと相手の思いを比べたり、その違いに気付いたりするととらえた。

【自分や友達の思いに気付くとは】

“自分の思いに気付く”とは、幼児が環境からの刺激を受け、自分のしようとしていることや感じていることがはっきりしていくことではないかととらえた。例えば、何をしたらいいか分からなかったり、友達の動きばかりを気にして友達について動いたりする状態から、自分が何をしたいのか、どのようにしたいのかなど、自分の思いがはっきりとしてくることである。そして、「わたしも、やってみようかな。」と動きや言葉に表し、それを繰り返していくことで自分の思いがさらにはっきりしたり、友達の言動に応じた自分なりの動きをしたりしていくことで、より自分の思いを意識していくのではないかと考えた。

“友達の思いに気付く”とは、友達とのかかわり合いの中で、相手がどのような考えや感じ方をしているかということを感じ取ることととらえた。例えば、友達が喜んでいるのを見て自分も嬉しいと感じた時、友達と目が合い同じに嬉しいと感じていることが分かった時など、相手の立場や心情などを推し量ったり、自分の思いと比べたり、違いを感じ取ったりすることと考えた。また、「ぼくは、～したいな。」など、互いに動きや言葉で主張する中で、自分とは違う友達の考えや思いに気付くことができると考えた。

【充実した生活につながるためには】

幼児は、「～したい」という思いをはっきりと意識していたり、自分が何をしたいのかわからないままに過ごしていたりすることがある。また、「～したい」という思いも、「～遊びがしたい」「～が欲しい」という遊びのきっかけになる思いから、「こういうふうに遊びたい」「もっと～したい」などのように、より具体的に鮮明になったり、強くなったりするなど、自分の思いに気付いていく過程においても様々な思いがみられる。このように幼児の思いに気づき、それを実現しようとすることで幼児の充実した生活につながると考える。

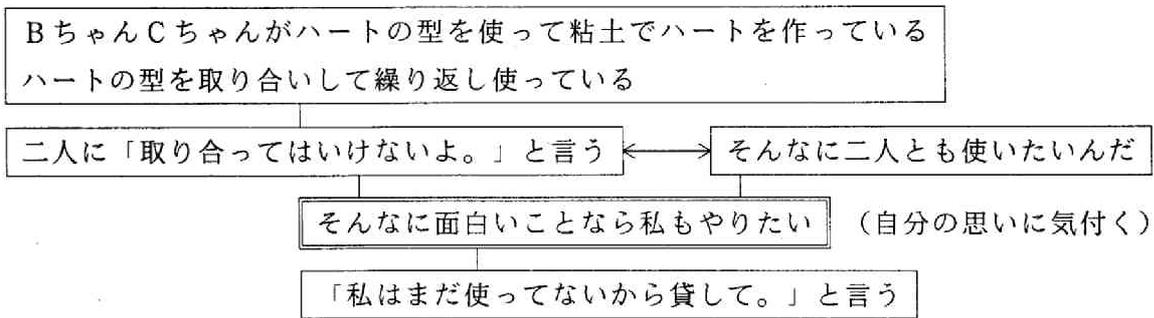
2 自分や友達の思いに気付くきっかけと過程

幼児の思いは、遊びの流れの中で常に揺れ動いている。幼児が自分や友達の思いに気付くきっかけと過程を事例から探った結果、様々なきっかけがあることが分かった。そのきっかけと気付きにつながる過程の概略を例示すると下記のようなになる。

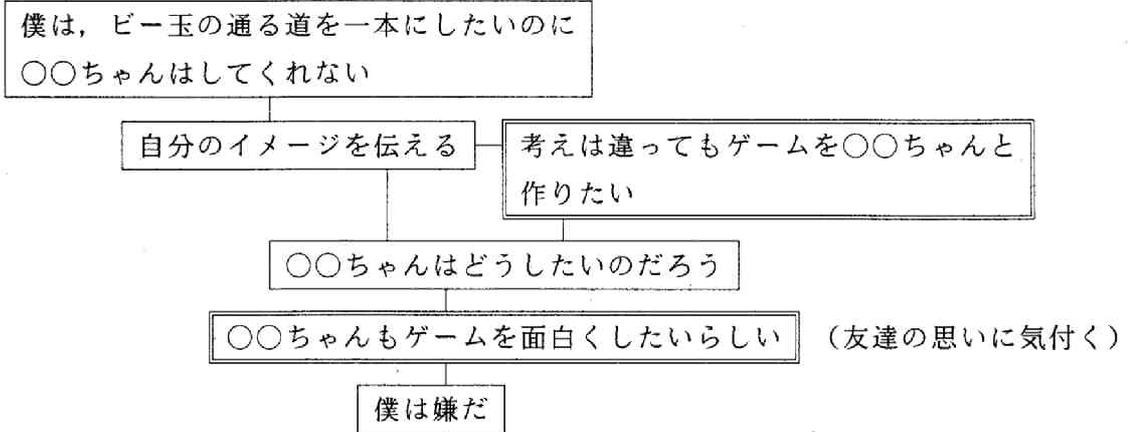
また、気付きの過程から、幼児が自分や友達の思いに気付いていくには、気付きのきっかけとともに、その基盤になるものや、人的、物的環境など、幼児を取り巻く様々なものが、互いに影響し合っていくことが分かった。事例から分かった気付きのきっかけと幼児の自分や友達の思いへの気付きの例と関連を示すと次頁の図のようなになる。

(1) 自分や友達の思いに気付く過程の例

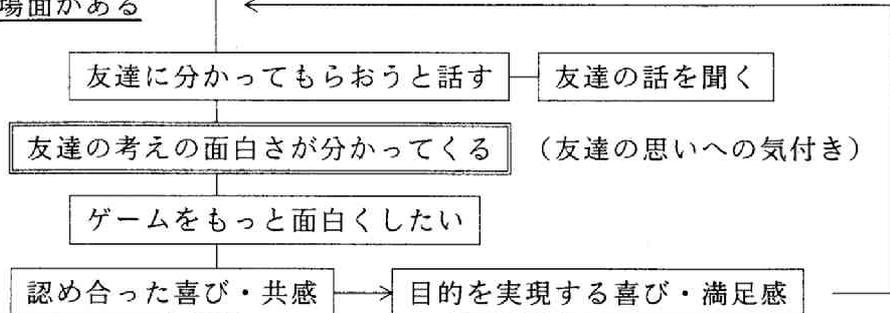
- ・ 教師や友達の刺激がある [詳細は P 18 事例(1)参照]



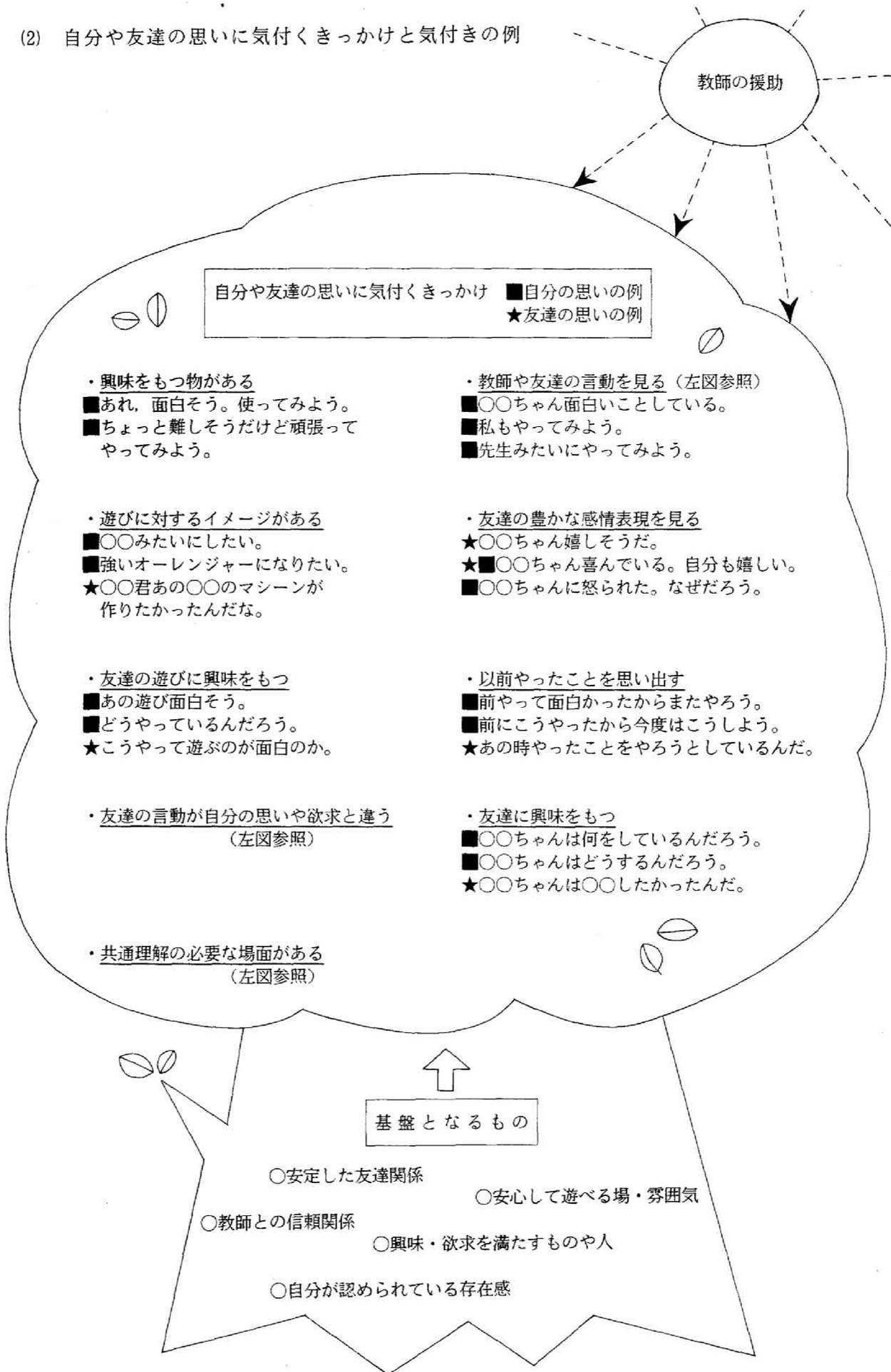
- ・ 友達の言動が自分の思いや欲求と違う時 [詳細は P 22 事例(3)参照]



- ・ 共通理解の必要な場面がある



(2) 自分や友達の思いに気付くきっかけと気付きの例



教師の援助

自分や友達の思いに気付くきっかけ ■自分の思いの例
★友達の思いの例

・興味をもつ物がある

- あれ、面白そう。使ってみよう。
- ちょっと難しそうだけど頑張ってやってみよう。

・教師や友達の言動を見る (左図参照)

- ちゃん面白いことしている。
- 私もやってみよう。
- 先生みたいにやってみよう。

・遊びに対するイメージがある

- みたいになりたい。
- 強いオーレンジャーになりたい。
- ★○○君あの○○のマシーンが作りたかったんだな。

・友達の豊かな感情表現を見る

- ★○○ちゃん嬉しそうだ。
- ★■○○ちゃん喜んでいる。自分も嬉しい。
- ちゃんに怒られた。なぜだろう。

・友達の遊びに興味をもつ

- あの遊び面白そう。
- どうやっているんだろう。
- ★こうやって遊ぶのが面白いか。

・以前やったことを思い出す

- 前やって面白かったからまたやろう。
- 前にこうやったから今度はこうしよう。
- ★あの時やったことをやろうとしているんだ。

・友達の言動が自分の思いや欲求と違う (左図参照)

・友達に興味をもつ

- ちゃんは何をしているんだろう。
- ちゃんはどうするんだろう。
- ★○○ちゃんは○○したかったんだ。

・共通理解の必要な場面がある (左図参照)

↑
基盤となるもの

○安定した友達関係

○安心して遊べる場・雰囲気

○教師との信頼関係

○興味・欲求を満たすものや人

○自分が認められている存在感

3 実践事例

幼児が遊んでいる場面を観察した記録を14ページに示した視点で分析・考察し、幼児が自分の思いや友達の思いに気付く過程をとらえ、指導の在り方を探る。

事例(1)

友達と同じ動きをするうちに自分の思いに気付いていった
A児の事例 (2年保育 4歳児)

6月上旬、A児は、何をしたいか分からずにいたが、C児が登園しうがいをしているのに気付いてそばに行った。二人で金魚の餌をやりながら、「Bちゃんどうしたんだろう。」「今日、遅い。お弁当まだ作っているのかな。」「寝坊しているかも。」などと、やりとりをしていると、B児が登園し保育室に入ってきた。二人は、すぐに駆け寄って行って、あいさつをしたりなぜ遅かったのか聞いたりした。A児は、C児について小鳥に餌や水をやっているときB児も身支度を終えて仲間に加わり、3人で小鳥の世話をした。

3人で小鳥の世話を終えた時、C児は、粘土でのクッキー屋ごっこをやろうと思い、A児B児に誘いかけた。

□ は、幼児の主な思い ♡は、感情 ☆は、友達の思いの気付き

A児の思いと言動	周囲の状況
<p data-bbox="229 1193 727 1290">①私の好きなB児，C児と遊びたい</p> <p data-bbox="229 1317 772 1451">・C児が言っている粘土のクッキー作りは面白そうだからやりたいと思い，C児の指にとまる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・C児は、粘土でクッキー屋をしようと思い「クッキー屋さんごっこするものこの指とまれ。」と歌うように言いながら誘い，指を出す。 ・B児も一緒にやりたいので指にとまる。
<p data-bbox="229 1480 759 1576">②好きな友達3人で粘土遊びをしよう</p> <p data-bbox="229 1603 552 1648">♡3人で遊べて嬉しい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・C児が粘土を置いた棚の所で，3人がそれぞれ粘土を丸めるが「わ，狭そうね。ここでやれば。」と言う教師の言葉から，3人で粘土遊びをするのによい場所に気付き，その机のところに行く。
<p data-bbox="229 1677 671 1774">③C児のまねをして丸めよう</p> <p data-bbox="229 1800 772 1980">・「これくらい。」「どっちが大きい。」などと言いながら，友達が作っている物を見たり話をしたりして，同じようにしようとする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・C児は，粘土を持って丸めながら，「私の言うようにして。」と言う。 ・C児は，「まだまだ。」と言ったり，B児は，「これくらいかな。」と言ったりして同じ大きさの団子を作る。 ・C児がハートの型を使い，その後B児と取

<ul style="list-style-type: none"> ・ 2人に「取り合いはいけない。」と言うが、2人がハートの型に執着しているのを見ているうちに自分も使いたくなる。 	<ul style="list-style-type: none"> り合ったり2人で繰り返し使ったりする。
<p>④ハートの型を使ってハートの形の粘土を作りたい</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ C児は、A児やB児の様子からハートの型を机の真ん中に置くようになる。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分は、まだ使っていないから貸して欲しいと主張し、使う。 ♡ハート型の粘土ができて嬉しい。 ☆B児は、雨がやんだから外で遊びたいかもしれない。 ・ 自分は、まだこの遊びをしたいので、「やだよ、楽しくないし。」と言ってスチレン皿に粘土を並べる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教師は、クッキーの入れ物に使えるようにスチレン皿などが入っているカゴを近くに置く。 ・ B児が、「雨がやんだ。」と言う。 ・ B児、C児も、スチレン皿にハートの形の粘土を並べる。

考察

○どのような感情を味わっていたか

- ・ 好きな友達と一緒に遊べる安心感や、友達と同じことをする楽しさを味わっている。
- ・ 一緒に遊びたいという思いが強いので、自分のやりたいことが友達の言動により実現できない不満は一過的で、自分を受け入れてもらおうと解消する。

○自分の思いや友達の思いに、どのように気付いていったか

- ・ C児の誘いをきっかけに、友達と一緒にいて、友達の動きを見たりまねをしたりしているうちに、次第に自分のやりたいことがはっきりしていった。
- ・ ハートの型に執着して取り合ったり、繰り返し使ったりしている友達の刺激を受けて、自分もハートの型を使ってハートの形の粘土を作りたいという思いに気づき、思いを主張することにつながった。
- ・ 日常のB児とのかかわりから、B児の「雨がやんだ。」という言葉でB児の外で遊びたいという思いに気付いている。そのことをきっかけに、自分はこの遊びを続けたいという思いを表わしている。

○教師の援助

- ・ 幼児の思いに添った教材<スチレン皿>や、3人で遊べる広さの机に気付くように教師が環境を構成したことで、遊びの持続や新たな思いを引き出すことにつながった。

このように、教師が友達とのかかわりを通して、自分で自分の思いに気付いている幼児の姿をとらえ、幼児が自分の思いをはっきりと感じてそれが実現できるように、幼児の思いに添って援助することが大切である。

事例(2)

友達の動きや物がきっかけになって自分の思いがはっきりしていったD児の事例
(2年保育 5歳児)

登園後D児, E児, F児は巧技台の所で遊ぼうとして遊戯室に行ったが, 先に他児がいて, F児は他児と場の取り合いのけんかになる。D児はけんかに入らず様子を見ている。けんかの後, 他児は玄関ホールで遊び始めた。教師の「あなたたちもここで作る?」という言葉かけで遊びの場が保障され, 遊びが始まった。

D児の思いと言動	周囲の状況
<div data-bbox="225 808 552 904" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">①これで基地を作ろう</div> <ul style="list-style-type: none"> ・「これで基地を作ろうか。」と言いな がら巧技台を運ぶことで, 基地を作り たいという気持ちを表わしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教師の言葉かけで遊びの場が保障された。 今まで漠然としていた遊びに対する思い が, ここで基地作りに向かっていく。
<div data-bbox="225 1093 552 1189" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">②すべり台を作りたい</div> <ul style="list-style-type: none"> ・すべり台をつけたら面白そうだと思い 斜面板をつけるのを手伝う。 ・E児がジャンプするのを見て, 面白そ うだなと思いやってみる。 <p>♡やってみると面白い。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・E児が斜面板を運んできたことがきっかけ となり, すべり台を付けたいという思いを もつ。 ・同じように遊ぶE児とF児がいる。 ・ジャンプを始めるE児がいる。
<div data-bbox="225 1473 584 1626" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">③一番高い所から ジャンプしたい</div> <ul style="list-style-type: none"> ・両手を振りながら勢いをつけて跳ぼう とする。 <p>♡ハラハラ, ドキドキしている。</p> <p>☆F児の動きや表情を見て, F児が自分</p> <p>と同じようにためらう気持ちや, 怖い</p> <p>気持ちを味わっていることに気付く。</p>	<p>(少し難しいが挑戦してみようと思う高さ と距離の巧技台である。)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・D児の動きから跳ぼうとしていることが分 かり, F児もやってみようとする。 ・F児も両手足でいろいろなポーズをとって 跳ぼうとするが, なかなか跳べずにいる。

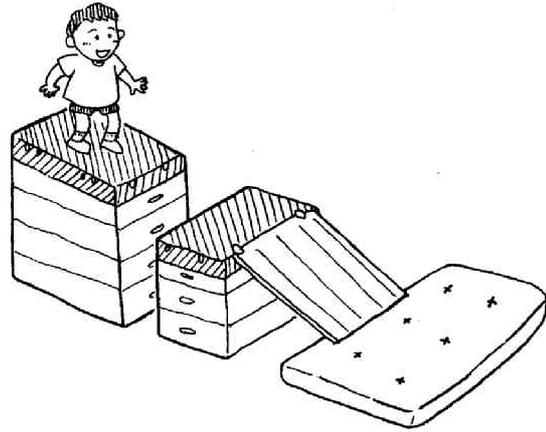
- ・ F児頑張れよという気持ちで「ヨーイ、スタート」と声をかける。

④よし、跳んでみるぞ

- ・ 跳べなかったF児の姿を見て「よし、跳ぶぞ。」という思いが強くなり、跳ぶ。

↓♡できちゃった。嬉しいな。

⑤もう1回やってみよう



- ・ E児、F児が「わあー。」という歓声をあげながらD児を見る。
- ・ E児とF児がまねをして跳ぼうとする。

考察

○ どのような感情を味わっていたか

- ・ 友達が自分の思いを受け入れてくれる心地よさを味わっている。
- ・ 少し難しそうな高さの巧技台に挑戦して、ジャンプできた嬉しさや喜びを感じている。
- ・ ハラハラドキドキするスリル感を味わいながら、気持ちが高揚していくのを感じている。

○ 自分や友達の思いに、どのように気付いていったか

- ・ 友達が斜面板を運んでくる、友達が自分のまねをしてくれる、友達がジャンプを始めるなどの友達の動きが、D児の思いがはっきりしていくきっかけとなっている。
- ・ 少し難しそうで挑戦できる物を見つけたことで、D児の思いがはっきりしてきている。
- ・ F児の動きを見て、自分が味わっていたためらう気持ちや怖い思いをF児も味わっていることが分かった。同じような感情を味わっている友達の思いに気付いたことで、④のような自分の思いを強くもつことができた。

○ 教師の援助

- ・ D児が自分の思いを出しやすいように、友達関係の安定を図り、遊びの方向を定めていけるような物の提示や、イメージをもてるような遊びの援助が必要である。
- ・ 自分の思いに気付くためには、挑戦したいと思うような環境を構成したり、「友達と一緒に。」と感じ安心して気持ちを奮い立たせて取り組める機会を作ったりすることも効果的な援助である。



事例(3)

友達と目的を実現するために、遊び方について共通理解を必要とする場面に出合い、相手の思いに気付いていったH児の事例（3年保育 5歳児）

7月上旬H児は、I児・J児・K児の3人と一緒にビー玉の迷路ゲームを作るという共通の目的をもった。「大きい箱に作ろう」「段ボールを使おう」などと友達と相談しながら、ゲームの外枠に使う箱を選び、作り始める。

H児の思いと言動	周囲の状況 (は周囲の友達の思い)
<p style="text-align: center;">①気の合う友達と、ビー玉ゲームを作りたい</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ビー玉ゲームの部品に使う材料を、友達や教師と一緒に探し選ぶ。 ・以前の経験を思い出し、友達に「前さ、ここに迷路作ったよね。」と言う。 <p>☆友達も自分と同じ目的なんだな。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・材料と一緒に探し選ぶ。 ・H児に言われて、I児は、過去に作ったゲームのことを思い出す。 ・二人ずつに別れてゲームを作る。 <p style="text-align: center;">(H児とI児, J児とK児)</p>
<p style="text-align: center;">②ビー玉が通る迷路のゲームを作りたい</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ゲームの外枠の蓋をはさみで切りながら、ビー玉の通り道を作る考えを言う。 <p>♡作る楽しさ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・箱の蓋を段ボール切りで切り始める。 ・H児の考えを聞くが、先に蓋を切ってゲームの外枠を作ることを主張する。
<p style="text-align: center;">③早くビー玉の通り道をはっきりしたい</p> <ul style="list-style-type: none"> ・材料入れからビー玉を取り出す。 <p>☆I児は外枠を完成させることにこだわっているらしい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・I児が切っている部分を手伝う。 	<p style="text-align: center;">先にゲームの外枠を完成させたい</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「まだ、ビー玉はいらないよ。」と言い、外枠の箱の蓋を切り続ける。 ・H児が代わって切ってくれるので、I児は、切りやすいよう箱を押しやる。
<p style="text-align: center;">④筒を使ってビー玉が通る道を作りたい</p> <p>☆I児は違う進め方で作りたいのだな。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分のゲームのイメージを伝える。 <p>☆I児の気持ちもゲームの内容に向かってきたことを感じとる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・箱と箱のつなぎ目を切り取ってつなぐ。 ・つなぐ部分に筒を付ければ失敗しないことを、H児に説明する。 <p>♡自分の考えが認められた喜び</p> <ul style="list-style-type: none"> ・別のゲームを作っているJ児・K児の思いも聞く。 <p>☆ゲームをつなげたいのだな。</p>	<p style="text-align: center;">迷路の部品を切ってから迷路を考えたい</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友達や教師がどんなゲームになるのか聞き、期待する気持ちを伝える。 ・I児も自分の作りたいゲームのイメージをH児や教師に伝える。 ・H児が考えたビー玉の道を受け入れる。 ・H児の考えではつなぎ目にビー玉がぶつかり失敗するのではないかと伝える。 ・H児の考えが分かり「それ、いいね。」と認める。 ・H児に聞かれて、J児やK児は「ゲームをつなげたい。」と言う。

・ 2つのゲームをつなげる工夫をする。 ↓

⑤ビー玉の迷路をゴールまで一本にしたい

・ I児が付ける道を「ここに付けないで」と、拒否する。

♡自分の考えを受け入れてもらえない不満

☆友達は自分の考えと違うんだな。

・ 分かってもらおうと話したり、友達の考えもよく聞こうとしたりする。

・ 何度も試して、ビー玉が迷路のいろいろな道を通る様子をよく見る。

☆友達の考えの面白さが分かってくる。

⑥ゲームをもっと面白くしたい

・ 波板段ボール片を使って迷路を工夫し、カーブする道を作る。

・ 友達の考えた、『パワーを吸い取る道』『トンネル』などのアイデアを認め、ゲームを自分でやって楽しむ。

♡目的を友達と一緒に実現した喜び

・ H児と一緒につなげる方法を考える。

ゲームを面白くするために、ゴールや迷路を増やしたい

・ I児は、自分の考えがゲームを面白くするために必要なことを説明する。

・ K児も、ビー玉がいろいろな道を通ってゴールに行く面白さを伝える。J児は、試してみる必要性をH児に伝える。

・ H児と一緒に何度も試して、ビー玉がいろいろな道を通る様子を楽しむ。

・ 工夫して迷路やトンネルなどを作る。

・ H児の工夫が分かり、認める。

・ 友達や教師も一緒にゲームを楽しむ。



考 察

○ どのような感情を味わっていたか

・ 友達に自分の言動を受け止められる喜びとともに、受け入れてもらえない時に自分の気持ちをコントロールすることや、相手の思いを受け入れる必要性を感じとりながら、友達と一緒に考えを出し合って目的を実現する楽しさを味わう。自分のイメージや考えが実現した満足感を味わう。

○ 自分や友達の思いに、どのように気付いていったか

・ 共通の目的があることにより、ゲームの作り方について共通理解を必要とする場面（①④⑤）があり、そこで友達が違う考えを出したり、自分の思いを受け入れてくれたりすることによって自分の思いがはっきりしたり、相手の思いに気付いたりしている。

・ 共通経験を思い出し合うことによって（①）、自分の思いを具体的にしたり、相手の思いを知ろうとしたりしている。

・ 友達の考えを受け入れて試すことで、ゲームの面白さが分かり友達の思いにも気が付いた。

・ 相手の言動に興味をもっていることや、自分の話を聞いてくれるであろうという仲間に対する安心感や仲間としての意識が、友達の思いに気付く要因になっている。

○ 教師の援助

・ 思いを実現しようとする姿を温かく見守りながら、イメージが実現しやすい材料をこれまでの経験を踏まえて提示したり、目的実現の喜びに共感したりしていくことが大切である。

・ 互いに考えを出し合ったり受け入れ合ったりして進めている姿を認め、友達の思いに気が付きにくい場面では、相手の言動に気持ちが向けられるようなかわりも必要である。

IV まとめと今後の課題

1 まとめ

研究を進めてきた中で、自分や友達の思いの気付きについて次のようなことが分かった。

- (1) 幼児は、自分から周囲の環境に働きかける中で様々な欲求・興味をもち、自分の思いがはっきりしていく。自分の思いに応じて環境とかがわり、その思いを実現して遊ぶと面白いという経験の積み重ねが、周囲にいる友達の思いにも目が向くことにつながる。
- (2) 幼児は、友達とのかかわりの中で自分の欲求や思いを出し、それに対して友達が呼応したり反論したりするなど反応してくれることや、友達のしていることを見て、自分もやってみようと思ったり行動したりすることで、自分の思いをより意識していく。この幼児の思いは一つではなく、幾つもの思いが友達とのかかわりの中で揺れ動いているといえる。また、友達と遊びたいという思いに支えられているからこそ、友達の思いに目を向けるようになっていく。このように、自分の思いに気付くことと友達の思いに気付くことは、相互に関連している。
- (3) 幼児は遊びに対する思いやイメージが強ければ強いほど、友達の思いやイメージにぶつかる機会が多くなり、友達の思いに気付きやすい。また、友達の思いに気付くことが多ければ多いほど遊びに対するイメージが強くなり、充実した遊びや生活につながるができることが分かった。

また、教師の援助の在り方としては、次のようなことが分かった。

- (1) 自分の思いに気付くためには、興味をもつような物や自分に働きかけてくれる友達、受け入れたいような動きをしている友達の存在が必要であることが分かった。自分の思いに気付くきっかけやモデルになるような友達の動きが見られない時には、教師がその友達の役割を果たすことも必要である。
- (2) 幼児の思いは一つではなく様々な思いが揺れ動いている。その思いのどれをどのように実現すればその幼児の発達に必要な経験ができ、充実した生活につながるのかを見取り、援助をしていくことが大切である。そのためには、幼児の動きや思いを的確に受け止め、幼児の思いに添って援助の方法を工夫する必要がある。

2 今後の課題

今年度は様々な幼児の事例から自分や友達の思いに気付くきっかけや要因と教師の援助を探ってきた。今後は、継続的に対象児を観察し、自分の思いに気付いていく過程を明らかにし、幼児の内面により近づくための援助を探っていきたい。